

甘南州卓尼・迭部・舟曲 3 県の チベット系諸言語とその下位分類試論

鈴木博之

1 はじめに

本稿では、中国甘肅省甘南 [Kan-lho] 藏族自治州南東部に位置する卓尼 [Co-ne]・迭部 [The-bo]・舟曲 [’Brug-chu] の 3 県で話されるチベット系諸言語の分類方法について、周辺部で話される諸言語も視野に入れて検討し、これまでに提出されていない新たな言語区分を提案する。本議論の目的は、これまで部分的にしか知ることのできなかつた方言の内部分岐の全体像を提示し、これからの方言学的、言語地理学的、また歴史言語学的研究の際の地点選定より妥当性の高い議論を行うための基礎的資料とすることにある。

甘南州は甘肅省南端に位置し、今日の行政区分上では南に四川省と接し、西に青海省と接する。チベットの伝統的な地理区分ではアムドに属し、同地域の東側は漢文化圏と接触する位置にある。甘南州のチベット語は言語学上単一の言語ととらえることのできない、相互に意思疎通の不可能な複数の言語群から成り立っている (Tournadre 2014)。話者数が最も多いのはアムドチベット語であるが、州南東部に位置する卓尼・迭部・舟曲の 3 県で話される変種はアムドチベット語とは全く異なり、複数の先行研究によってさまざまな分類やチベット言語学上の位置づけが検討されてきた (瞿霽堂・金效静 (1981)、張濟川 (1993)、楊士宏 (1995)、瞿霽堂 (1996)、Zhang (1996)、Sum-bha Don-grub Tshe-ring (2011)、仁増旺姆 (2013) など)。これらの変種に関する現段階の広く受け入れられている認識としては、これらがカムチベット語の独立方言群を構成するというものであろう。

ところが、卓尼・迭部・舟曲 3 県で話される諸変種は互いに異なるだけでなく、県境ではないところで大きく相互理解度の異なる複数の方言群から成り立っている。瞿霽堂・金效静 (1981) や瞿霽堂 (1996) などは卓尼方言と舟曲方言の 2 つに分ける案を提出している。一方で《舟曲県誌》(1996) のような県誌や複数の先行研究 (2 節参照) が各県の内部分岐について詳細に検討しているが、県を超えた範囲で分類を試みているものはほとんどない。張濟川 (1993) は一方でこれら 3 県の諸方言を区分せず単一のカムチベット語下位方言群を形成する案を提出してはいるが、全体として 1 つの方言群を形成するかどうかについて言語資料を用いて検討した研究は、初歩的な検討を行った Suzuki (2013) や Powell & Suzuki (2014) を除いて未見である。楊士宏 (1995, 2009) は確かに同地域の方言群全体を扱ってはいるが、アムドチベット語の変種として取り扱っているなど、分析の枠組みも主張も大きく異なる。

2 先行研究と具体的な問題点

2.1 まとまった記述研究

楊士宏(1995)は甘肅省南部の6地点の語彙2000語余りをまとめた語彙集である。これらの地点のうち、本稿の議論の対象地域に含まれるものは3種(さらに1種も参考になる)含まれ、それぞれ卓尼県藏巴哇[gTsang-pa-ba]郷、迭部県卡彌[Kha-pa]郷・桑彌[Byams-'bab]郷、舟曲県立節[gLu-rtse]郷(加えて宕昌[Ther-rgyud]県新城子郷)のものである。藏巴哇郷および立節郷の資料は、現在では話者数が激減してしまったため貴重なものであるといえる。卡彌郷・桑彌郷の資料というのは、2.2でも述べるように、異なる下位区分に属する方言になるため、これらを混ぜて記述している点で資料的価値が失われてしまっている。それぞれの方言の音体系が帰納されていないこともあり、方言資料として体系的に利用するには1つ1つ語彙を調べて音体系を構成する作業が必要とされる。

rNam-rgyal Tshe-brtan(2008)は卓尼県卡車[mKhar-chen]郷(沙蓋足[Bya-rgod-tshang]村)、尼巴[Nyin-pa]郷、藏巴哇郷の各方言の音声記述と夏蓋足村および藏巴哇郷の方言の語彙を含んでいる。声調の記述が一貫していないなどの問題があり、直接資料として使うのは難がある。

仁増旺姆(2013)は迭部県電尕[sTeng-ka]鎮、旺藏[dBang-gtsang]郷、洛大[Ri-dwangs/Rong-thag]郷の各方言の音声記述と語彙約2100語を含んでいる。音声表記が一貫しており、直接資料として使うことができる。

共確加措(1987)の記述は「色繞龍哇[gSer-rong Lung-ba / gSer-gzhung Lung-ba]」という名称のもとに、記述対象の方言が郷・村レベルで特定されていない点が難であるが、言語資料の性格から迭部県桑彌郷のものであると考えられる。この資料は収録語数が少ないが音声記述が明快であり、有用である。Tournadre & Konchok Jiatso(2001)に含まれる“Thewo”方言も、この方言と同じ変種と考えられる。

2.2 先行研究における各県の言語分類

先行研究において卓尼・迭部・舟曲3県の県ごとに行われている方言分類の概要を整理する。

2.2.1 卓尼県

rNam-rgyal Tshe-brtan(2008:31-46)の記述によれば、卓尼県内のチベット語方言は以下の4種類に分かれるという。

1. 洮河[Klu-chu]北西部(完冒[Wa-dmar]郷、康多[Khang-thog]郷、申藏[Shing-gtsang]郷、勺哇[Sho-ba]郷、阿子灘[A-gzigs-thang]郷)

2. 洮河流域南部（尼巴郷、刀告 [mDo-khog] 郷、扎古録 [Brag-khog-lung] 鎮）
3. 洮河流域沿岸部（卡車郷、納浪 [gNa'-lug] 郷、柳林 [lCang-tshal] 鎮、木耳 [Mar] 鎮）
4. 洮河東部（洮硯郷、藏巴哇郷）

このうち1.の変種は、アムドチベット語である。そのほかが多く、の先行研究がカムチベット語とみなす変種である。これについて、鈴木(2012)で Bragkhoglung 方言の記述を通して検討した結果、Bragkhoglung 方言が属するとされる洮河流域南部方言群に含まれている Nyinpa 方言が卓尼県の中でも独特の音対応を見せていることから、方言の下位区分としてこれら両者を同じ群にまとめる必要性は認められないという結論を提示した。

2.2.2 迭部県

The-bo Tshul-khrims (2013:257)によると、迭部県内のチベット語方言はおおよそ以下の6種類に分かれるとしている。郷鎮名のみ以下に掲げる。

1. 益哇 [gYi-ba] 郷、電尕鎮
2. 達拉 [sTag-ra] 郷
3. 卡霸郷、尼傲 [Nyin-'go] 郷、旺藏郷
4. 多兒 [rDo-ra] 郷、阿夏 ['A-zha] 郷
5. 桑霸郷
6. 洛大郷、臘子口 [Lha-gzigs-'gag] 郷

2.2.3 舟曲県

dByin bKra-shis Phun-tshogs (2013:283-284)によると、舟曲県内のチベット語方言は以下の3種類に分かれるとしている。

1. 山裏 [ri-rgyab] 地区：拱壩 [dGon-pa]、博峪 [Bod-yul]、大年 [sTag-gnyan]、挿崗 [Tsha-ba-sgang] など6つの郷
2. 山前 [ri-mdun] 地区：八楞 [Ong-gsum]、Tshe'u-skam、果耶 [sGang-yul] など6つの郷
3. 白龍江上流地区：峰迭 [Khams-sgang] 郷、巴藏 ['Ba'-gtsang/dPa'-mdzangs] 郷、慙班 [Bod-rtsa] 郷、曲瓦 [Chu-dkar/Chu-bar] 郷など7つの郷

このうち、第2のグループには隣接する武都、宕昌 [Ther-rgyud] に少数分布するチベット族の話す言葉と共通し、また、第3のグループは隣接する迭部県の下迭地区の2つの郷で話される言葉と共通するという記述がある。

また、第1と第2の分類については、鈴木(2014)に検討されているように、言語学的にも意味のある分類であることが検証されている。

2.3 先行研究における言語分類の問題点

先行研究における言語分類の抱える主な問題点は、2節で述べたように各県ごとに行われており、県を超えた状況が検討されていないことのほか、言語資料がほとんど提示されていない点もある。共確加措(1987)には「色繞龍哇」という伝統的な地名のもとに、迭部県から九寨溝県(旧名「南坪県」)にかけて分布する諸方言が互いに通用性があるという記述があるが、具体的な方言形式の対照が行われていない。記述されている言語は2.1で述べたように、迭部県桑壩郷のものであろう。各方言の記述が提示されている rNam-rgyal Tshe-brtan (2008) や仁増旺姆(2013)のような研究は非常に少ない。

瞿霽堂(1996)などの主張する方言分類は主に1950年代に中国全土で行われた少数民族言語一斉調査(普查)の結果をもとにしていると考えられるが、チベット語の方言調査状況(Zhang 1996)を考えてみると、2.2に述べたような状況を理解しないまま行われた資料に基づいて行われているものと考えられる。

Zhang (1996)には舟曲という地名が含まれているが、これには大きな疑問がある。「舟曲方言」の調査地点名に触れる文献は張濟川(2009)のみで、そこでは「舟曲(洛大)」となっている。ところが、洛大というのは、現在の行政区画に照らせば迭部県洛大郷(2.2参照)のことを指すと考えられ、そうであれば現在の迭部県の記述報告になるといえる。このような事態が起こっている背景には、ちょうど1950年代の一斉調査のころに舟曲県の行政区画が変更になっていること(《舟曲県誌》1996:70-71)が影響していると推測できる。これに基づいて成立していると考えられる、先行研究の「舟曲方言」を独立方言群と考える枠組みに十分な注意が必要とされる(鈴木2013, 2014)。

また、これらの地域の言語をカムチベット語の下位方言と位置づける観点については、言語学的に方言分類の基準となる「共通の改新」と、単なる類型特徴の類似を混同している点、および同地域の歴史的背景を踏まえていない点の双方から批判されるべきものである。前者の問題については、仁増旺姆(2013)のような全面的な記述研究においても変わるところがなく、主に中国における方言研究において根本的に理解の及んでいない点であると言わざるを得ない。後者の問題については、洲塔(1996:12)や周毛草(2003:2)、Sum-bha Don-grub Tshe-ring (2011:37-38)に記述されるように、舟曲県のチベット人は現チベット自治区の工布[Kong-po]地区からの移民の末裔であるといわれている。同様に、迭部県のチベット人は現チベット自治区の達布[Dwags-po]地区からの移民の末裔、卓尼県のチベット人は現チベット自治区の澎波[Phan-po]地区からの移民の末裔といわれている。これらの地域は伝統的に

チベット中央部に属し、カム地域ではない。それゆえ、これらの地域からの移民であるというのが史実ならば、カム地域で話されている言語変種と舟曲県のチベット語との間に歴史的関連を認めることはできず、後者がカムチベット語に属する必然性もまた存在しない。

総じて先行研究の言語分類を踏襲するには明らかな困難があり、安易に従うべきものではない。各種方言の記述を積み重ね、先行研究にとって代わる新しい枠組みが必要とされる。

3 省境・県境を越えた分類試案

Suzuki (2013) は本稿で議論した諸言語についてはじめて地図上に言語レベルでの分類を示したものである。ただし、各言語の下位方言分類については、資料の不足から十分に行われていない。

鈴木 (2013, 2014) が舟曲県の方言分類を提示するときに、迭部県の方言群との関連を具体的に示した。Tournadre (2014) でも複数の言語群を認める案を提出しているが、現段階で考え方を一部変更しさらに細分化している。これについては Tournadre & Suzuki (forthcoming) に提示される予定である。

筆者による以上の記述研究およびそれに付随する相互通用性に関する調査によって得られた資料をもとに、修正を加えた分類試案は以下のようになる。「・」印の位置にあるものを独立言語、「-」の位置にあるものを各下位方言群とみなす。なお、当該地域にはアムドチベット語およびペマ語が分布するが、以下の分類からは除外する。また、各言語の下位区分のうち、卓尼・迭部・舟曲3県以外にのみ分布する方言群については言及しない。鈴木 (2009)、Suzuki (2009) の分類もあわせて参照されたい。

- Cone (卓尼) チベット語
 - 西部方言群
卓尼県扎古録鎮、刀告郷、完冒郷のいくつかの村落
 - Kluchu (洮河沿岸部) 方言群
卓尼県卡車郷、納浪郷、柳林鎮、木耳鎮
 - 東部方言群
卓尼県洮硯郷、臧巴哇郷
- Thewo-stod (上迭) チベット語
 - Thewo-stod (上迭) 方言群
迭部県益哇郷、電尕鎮；若爾蓋県鉄布区降扎郷、占哇郷、凍列郷、熱爾郷、崇爾郷
 - Nyinpa (尼巴) 方言群
卓尼県尼巴郷
- Thewo-smad (下迭) チベット語

- Thewo-bar (中迭) 方言群
迭部県卡霸郷、尼傲郷、旺藏郷
- Thewo-lho (南迭) 方言群
迭部県阿夏郷、多兒郷
- gSerpo (黒峪) 方言群
迭部県洛大郷、臘子口郷；舟曲県曲瓦郷、巴藏郷、恐班郷、峰迭郷
- Byambab (桑霸) 方言群
迭部県桑霸郷
- dPalskyid (巴西) チベット語
 - dPalskyid (巴西) 方言群
迭部県達拉郷；若爾蓋県巴西区巴西郷、阿西茸郷、求吉郷
- mBrugchu (舟曲) チベット語
 - Thergyud (宕昌) 方言群
舟曲県八楞郷、果耶郷 (旧三角坪郷および旧池干郷が合併)、南峪郷など；武都区坪壩郷；宕昌県新城子郷など
 - dGonpa (拱霸) 方言群
舟曲県插崗郷、武坪郷、拱霸郷、大年郷、鉄霸郷、博峪郷の多くの村落など
 - 江盤郷方言群
舟曲県江盤郷内のいくつかの村落

筆者のこれまでの記述と大きく異なるのは、迭部県で話されている言語は「1つの言語の下位区分」に属するのではなく、それぞれが独立した言語を形成し、その中に一定の大きい方言差異が存在すると考えている点にある。以上の分類は、言語学的な検証を経た一部を除いて、現段階でまだ確定的ではない。特に Thewo-smad チベット語の下位区分、また Nyinpa 方言の言語所属については、本稿の仮説を検証する言語学的手続きが必要とされる。

4 まとめと課題

本稿では、甘南州南東部に位置する卓尼・迭部・舟曲3県で話されるチベット系諸言語の全体像とその分類方法について、筆者の現地調査で記述した言語資料をもとに、現地で得た方言の相互通用性や歴史に関する語りなどさまざまな情報を考慮し、また周辺部で話される諸言語も視野に入れて検討し、新たな言語区分を提案した。この提案はあくまでも仮説にすぎず、各言語・方言の記述研究と比較研究を通じて言語学的に検討される必要性のあるものである。

方言学的研究、特に地理言語学的研究においては、可能な限り細かい調査地点を設定し、資料を収集する必要がある。ただし、これらの分野で具体的に問いを立て、かつ地図を描く作業は、それなりの基礎的資料があって初めて可能となる。本稿は、方言学研究という観点から最低限調査すべき地点の選定に関して1つの有用な基準を提供したものと位置づけられる。

これからの研究では、実際の言語記述を通して以上に述べた課題につき詳細な検討作業が求められる。特に方言分類は共通の改新を経たものであるかどうかをチベット言語学の方法論に基づいて慎重に検証しなければならない。

伝統的手法にのっとるならば、チベット文語形式（蔵文）と口語との音対応を探る作業を通して、音対応を探るのが妥当な方法論である。ここでは1つの試みとして、本稿で言及した諸言語の部分的ではあるが基本的な蔵文との音対応を提示してみたい。具体的には、初頭子音部分の例として、蔵文足字 y, r を含む Ky, Py, Kr, Pr の組み合わせ、および蔵文 c/ch/j/sh/zh/s/z/sr 対応形式を総合的に見てみる。蔵文との音対応を総合的に検討する必要性は西田(1987)にも指摘されている。簡便のため言語・方言名は漢語で表記し、対応音は各調音位置の閉鎖音、破擦音、摩擦音の無声音で代表させる。対応関係が複数認められる場合は縦に並列する。音環境に基づく条件変異で現れることが確かなものは、音標文字に続けて[†]を付す。

言語名 方言群名 方言名	卓尼 西部 扎古録	上迭 尼巴 尼巴	上迭 上迭 益哇	下迭 中迭 旺藏	下迭 南迭 阿夏	舟曲 宕昌 八楞	舟曲 拱壩 拱壩
Ky	tɕ	tɕ	ts	ts	ts tɕ	ts tɕ [†]	ts tɕ [†]
Py	ɕ	ɕ	s	ɕ	ɕ	ɕ	s ɕ [†]
Kr	tɕ	tɕ	ts t	ts t	ts t	ts tʂ	ts tɕ t
ただし skr	^h ɕ	ɕ	^h s	^h s	^h s ^h ɕ	^h s	^h s
Pr	t	t	t	t	t	tʂ	t
ただし spr	r	ʂ	ɕ	ɕ	^h ʂ	^h tʂ	^h t
c/ch/j	tʂ	tɕ	tɕ	tɕ	tɕ	tɕ	cɕ
sh/zh	ʂ	x	x ɕ	x ɕ	x ɕ	x ɕ [†]	x ɕɕ ɕ [†]
s/z	s	s	s	s	s	s ɕ [†]	s ɕ [†]
sr	r	ʂ	^h ɕ	^h ɕ	ʂ	ʂ	^h ɕ

以上の諸言語について、通言語的特徴としては、藏文 Ky、Kr 対応形式が部分的に合流しているということ、藏文 Py、skr、spr 対応形式が摩擦音に対応する傾向にあること、藏文 Pr 対応形式がそり舌閉鎖/破擦音に対応することなどがあげられる。

以上の資料を見る限り、音対応の区分と言語区分は必ずしも一致しないことが分かる。また、各言語の下位区分の間に境界を認めるものもある。この意味するところの解明もまた将来の課題である。

参考文献

- 鈴木博之 (2009) <川西地区“九香線”上の藏語方言：分布與分類>《漢藏語學報》第3期 17-29
- (2012) 「甘肅省甘南州卓尼県のチベット語方言について—藏文対応形式から見た扎古録 [Bragkhoglung] 方言の方言特徴—」『京都大学言語学研究』第31号 1-23
- (2013) 「藏文対応形式から見た舟曲県チベット語拱壩 [dGonpa] 方言の特徴—舟曲県チベット語の概説を添えて—」『京都大学言語学研究』第32号 1-35
- (2014) 「舟曲県チベット語八楞 [Ongsum] 方言の音声分析とその方言特徴」『アジア・アフリカ言語文化研究』第87号 241-263
- 西田龍雄 (1987) 「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』108-169 冬樹社
- dByin bKra-shis Phun-tshogs (2013) 'Brug-chu'i bod dang bod-skad rags-tsam gleng-ba. In Sum-bha Don-grub Tshe-ring (bsgrigs) 278-332
- rNam-rgyal Tshe-brtan (2008) *Co-ne'i bod-skad-la dpyad-pa*. (《藏語卓尼話研究》) 中央民族大学碩士論文
- Powell, Abe & Hiroyuki Suzuki (2014) *Phonetic distance at the northeastern tip of the Plateau: A study of the synchronic relationships of Tibetan dialects in the Gansu-Sichuan border area*. Paper presented at 47th ICSTLL (Kunming)
- Suzuki, Hiroyuki (2009) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography — a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan —. In Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet—New Perspective towards Historical Methodology (No. 16102001) Report Vol.3*, 15-34, National Museum of Ethnology
- (2013) *Something different from the pitch: evidences against the monogenesis of the suprasegmentals from the Eastern Tibetic languages*. Poster presented at the 3rd Workshop on Sino-Tibetan Languages of Sichuan (Paris)
- Sum-bha Don-grub Tshe-ring (2011) *Bod-kyi yul-skad rnam-bshad*. 中国藏學出版社

- Sum-bha Don-grub Tshe-ring (bsgrigs) (2013) *Bod-kyi yul-skad-la dpyad-pa'i gtam mu-tig phreng-ba zhes bya-ba bzhugs-so*. 民族出版社
- The-bo Tshul-khrims (2013) The-bo'i yul-skad-la cung-zad dpyad-pa. In Sum-bha Don-grub Tshe-ring (bsgrigs) 254-269
- Tournadre, Nicolas (2014) The Tibetic languages and their classification. In Thomas Owen-Smith & Nathan W. Hill (eds.) *Trans-Himalayan Linguistics: Historical and Descriptive Linguistics of the Himalayan Area*, 105-129, Walter de Gruyter
- Tournadre, Nicolas & Konchok Jiatso [dKon-mchog rGya-mtsho] (2001) Final auxiliary verbs in literary Tibetan and in the dialects. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 24.1:49-111.
- Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (forthcoming) *The Tibetic Languages: An Introduction to the Family of Languages Derived from Old Tibetan* (with the collaboration of Konchok Gyatsho and Xavier Becker)
- Zhang, Jichuan (1996) A sketch of Tibetan dialectology in China: Classifications of Tibetan dialects. *Cahiers de Linguistique - Asie Orientale* 25 (1), 115-133
- 周毛草 [’Brug-mo-mtsho] (2003) 《瑪曲藏語研究》民族出版社
- 洲塔 [’Brug-thar] (1996) 《甘肅藏族部落的社會與歷史研究》甘肅民族出版社
- 甘肅省舟曲縣地方誌編纂委員會 [Gansusheng Zhouquxian Difangzhi Bianzuan Weiyuanhui] (1996) 《舟曲縣誌》生活·讀書·新知三聯書店
- 格桑居冕 [sKal-bzang ’Gyur-med]、格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2004) 《實用藏文文法教程 [修訂本]》四川民族出版社
- 共確加措 [dKon-mchog rGya-mtsho] (1987) 〈色繞龍哇藏語初探〉《西藏研究》第2期 53-69
- 瞿靄堂 [Qu, Aitang] (1996) 《藏族的語言和文字》中國藏學出版社
- 瞿靄堂 [Qu, Aitang]、金效靜 [Jin, Xiaojing] (1981) 〈藏語方言的研究方法〉《西南民族學院學報》第3期 76-84
- 仁增旺姆 [Rig-’dzin dBang-mo] (2013) 《迭部藏語研究》中央民族大學出版社
- 楊士宏 [Yang, Shihong] (1995) 《一河兩江流域藏語方言匯要》甘肅民族出版社
- (2009) 《安木多東部藏族歷史文化研究》民族出版社
- 張濟川 [Zhang, Jichuan] (1993) 〈藏語方言分類管見〉戴慶廈等編《民族語文論文集—慶祝馬學良先生八十壽辰文集》297-309 中央民族學院出版社
- (2009) 《藏語詞族研究—古代藏族如何豐富發展他們的詞匯》社會科學文獻出版社